静岡図書館友の会　会報
vol.34
2025.10

巻頭エッセイ

映画と図書館—多様な価値観の接点

静岡新聞論説委員　橋爪　充

年間100本以上、映画を見るように努めている。新聞のコラムでネタになるかも、という「下心」は否めない。だが、それだけではないのも確かだ。

映画監督の黒澤明は「映画は人生をより良くするためにある」と言った。大げさに言えば、私は自分をアップデートするために映画館に通う。そこにはさまざまな価値観がある。どこか図書館に似ている。

映画に図書館が出てくると、句点が打たれたように感じる。きっぱりと何かが終わり、判明し、物語は次のフェーズに向かう。典型的なのは新海誠監督の「君の名は。」(2016年)だ。

男子高校生立花瀧は、夢の中に出てくる女子高校生宮水三葉のルーツを探る旅に出るが、現地住民から彼女が暮らした岐阜県で3年前に起こった大災害を知らされる。

彼は災害の実態を調べる。新聞や雑誌の記事、史料をたぐるのは公立図書館である。新海監督は、地域の過去の情報が集積された信頼の置ける場所として図書館を描いている。

名優エミリオ・エステベスが監督と主演を務める「パブリック 図書館の奇跡」(2018年)は、米シンシナティの公立図書館が舞台。周辺のホームレスが氷点下の夜を過ごす場所にしようと図書館を占拠する。

背景にはホームレスのシェルター不足という行政の課題がある。夜の街路で次々ホームレスが凍死するという現実も描く。

70人のホームレスとエステベス演じる図書館員は、生き死にをかけて閉館後の図書館に立てこもるが、そこには一定のユーモアがある。警察との尊厳に満ちたやりとりも印象的だ。

クライマックスのせりふが心に残る。「公共図書館はこの国の民主主義の最後の砦だ」。そして彼らはある行動に出る。ジョニー・ナッシュの1972年のヒット曲「I Can See Clearly Now」を歌いながら。

彼らは暴力的な手段ではなく、平和的な姿で自分たちの存在を社会に示す。「問題を可視化し、世の中に投げかける」という本作のラストシーンは、図書館の機能にも通じているように思えてならない。

「パブリック」と同じ問題が、フレデリック・ワイズマン監督のドキュメンタリー「ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス」(2017年)でも論じられていて、とても興味深い。映画の終盤、図書館の運営方針を決める理事会の面々が、ホームレスの利用について話し合う。

「開かれた場であることに責任がある」という声がある一方で、「一般の利用者と利害が対立している」と現状を訴える理事もいる。本作は恐らく2015年前後の撮影だろうが、10年後の現在、問題はさらに先鋭化しているのではないかと想像する。

どんな映画を見ても、図書館にはさまざまな人が集っている。多様な価値観との接点は、集まった書物だけが形作るものではない。図書館を担う人、支える人のかけがえのなさは、映画からも伝わってくる。

映画『パブリック　図書館の奇跡』の一場面
©EL CAMINO LLC.ALL RIGHTS RESERVED.
配給:ロングライド

新県立図書館　これまでとこれから
～静岡図書館友の会の取組について～

今年、創立100周年を迎えた静岡県立図書館は1970年に現在地に開館以来、50年以上を経て建物の老朽化・狭隘化が喫緊の課題となっていました。2017年、2階閲覧室の床に積載荷重と劣化によるひび割れがある事が判明し、当時の川勝平太知事が東静岡駅南口の県有地に移転・新築を表明し現在に至っています。移転計画から現在までの経緯と静岡図書館友の会の取組、今後について述べたいと思います。（勝山　高）

1.これまでの経緯

2017年、床面のひび割れに対する応急処置として、過重フロアの蔵書移動を行い、4カ月の休館を経て再開。その後、新図書館構想の策定に着手、2020年度までに基本構想・基本計画・整備計画を作成しました。また、2023年度には基本設計の概要について公表。昨年の9月県議会での予算成立を受け、入札を実施するも不調となり、細部の見直しによって入札金額の見直しを図るも、再度の入札不調に終わりました。さらに、規定財源として盛り込んでいた国の補助金が、当初の金額よりも大幅に減額されることが判明し、鈴木知事は事態を重く受け止め、

(1)一旦立ち止まって整備方針を見直す。
(2)デジタル技術の進展などの社会情勢の変化や、関係者の皆様の御意見も踏まえながら、東静岡地区にふさわしい施設を目指す。
(3)年内を目途に方向性を示せるよう、庁内に部局横断的なプロジェクトチームを立ち上げ検討を進める。

以上の3点を本年6月の県議会で表明しました。

2.静岡図書館友の会の取組（以下友の会）

友の会では新館構想が立ち上がる以前から、毎年、資料費の増額・専門性、経験性を重視した充分な職員体制などを静岡県読み聞かせネットワーク等の賛同団体とともに、要望書の形で知事・教育長に提出してきました。また、合わせて県図書館交流会を開催して、図書館職員とともにより良い図書館づくりに努めてきました。2017年の交流会では、「いま改めてこれからの県立図書館を考える」をテーマとして、参加者によるアピール文の採択を行い、さらに、同年7月には「新たな静岡県立図書館を望む会」を、県内184団体のもと立ち上げ、川勝平太知事・県議会議長に要望書を提出しました。要望書はその後、毎年提出しつつ、交流会・望む会と連携しながら、講演会等の共催事業や、周知のためのリーフレットの作成などを行ってきました。

3.これからの展望

新県立図書館は予定地(東静岡駅南口)に新築移転することは、知事も議会も了承していますが、どのような図書館を目指していくかは、ほぼ、白紙の状態と言っても過言ではないと思います。無論、基本計画そのものが大きく変更することは無いと信じたいのですが、危惧する材料として、①の整備方針そのものの見直しとは、図書館も含めた東静岡周辺の運用も視野に入れてのことであるなら、図書館の位置づけがなおざりになる可能性があること、②のデジタル化では、目新しさを求めるあまり拙速なデジタル化への危惧、③の県庁内の横断的な組織によって、図書館本来の使命や役割が見過ごされてしまう懸念などが挙げられます。具体的には、予算減額に伴う床面積減少による蔵書の別置、デジタル化のもとに紙媒体の廃棄、市町図書館を支援するという県立図書館の存在意義の低下などが考えられると思います。

（学校図書館を考える会・静岡　会報『このゆびとまれ　No.85』に掲載した勝山の原稿より転載）

こうした状況を憂慮し、静岡図書館友の会は「新たな静岡県立図書館を望む会」（平野雅彦代表）とともに、6月に「集い」（右ページ参照）を開催、8月には「県立としての専門性と機能を有し、市町立で購入しづらい高価本も収集できる十分な資料費を確保する」「書庫は利用者が一般書架と併用できるよう一体管理する」「司書などの専門職員を一定以上有する直営体制を維持する」の3点を特記した要望書を作成し、多くの方のご賛同を呼び掛けました。その結果、18日間の短期間に1401名の賛同を得て、9月12日に鈴木知事・竹内県議会議長あてに提出しました。長い道のりになりますが、一刻も早い新県立図書館の実現に向けて、皆様のご協力をお願いします。

※かつやま　たかし：静岡図書館友の会運営委員、静岡県読み聞かせネットワーク会長、（有）まるか勝山商店代表取締役

6月/実現を願う集い開催

6月16日（月）に緊急で「よりよい新県立図書館の実現を願う集い」を企画し、静岡県コンベンションアーツセンター（通称グランシップ）にて開催しました。
「図書館のよさ」「市町立図書館と県立図書館の違いと特色」「よりよい県立図書館に向けて」の3点のテーマで寄せられた42件から3人のメッセージ（下記に抜粋して掲載）のご紹介に続き、72名の会場参加者で新館に寄せる期待と希望を熱く語りあいました。
（全文は　静岡図書館友の会HP
https://shizutomo.jp）

「図書館のよさ」

学校図書館を考える会・静岡
朝倉久美子

図書館がいかに万人に優しく知りたいことはどこまでも探求できる素晴らしい機関であるかは、利用する人には周知の事実ですが、利用しない人には「巨額のお金をかけてもったいない」ということになるのでしょう。図書館の役割はいまや読書、蔵書構築、研究にとどまらず、「認知面」「社会面」「身体面」で健康にいいことは広く世の中に知られています。電子図書館の普及もまた多くの人のアクセスを可能にしています。街のにぎわいの拠点としても大きな役割を担っています。

大勢の多様な人の居場所になっている石川県立図書館。駅から徒歩3分の山梨県立図書館は電子機器の充実も驚きましたが、カフェ、高齢のご婦人たちがポーカーを楽しんでいる部屋や屋外の葡萄棚がまるで北欧の図書館のように街にとけ込んでいます。YAコーナーの活況ぶりとアートな雰囲気で、若者の居場所として定着している武蔵野市立図書館武蔵野プレイスも魅力的でした。お金がなくても、楽しくて役に立つ、知りたいことにはどこまでも付き合ってくれる、街のシンボルとなりにぎわいを呼ぶ、こんな素晴らしい税金の使い道は他にはないと思います。

「市町立図書館と県立図書館の違いと特色」

牧之原市　教育委員　元図書館司書
吉住幸子

市立図書館の現場からしますと、バックに県立図書館がありますので、目の前のお客様に、「どんな本でも用意できます」と言えます。市民の満足度は図書館のサービスの満足度に左右されます。これは本だけでなく、質問への回答サービスでも同じです。自分の館にはなくても県立図書館を通して県内のすべての図書館から本が借りられます。また、質問回答サービスは、自分の館の資料では答えられない質問がかなりあります。こんな時、私たちは〇〇の資料に当たりましたが、回答できませんでしたと県立図書館に告げて、回答を依頼します。そして、それを、県立図書館からの回答として、そのまま市民に渡します。このような県立図書館のバックヤードがあるので、現場の市町の図書館は毎日安心して市民にサービスができています。

「よりよい県立図書館に向けて」

静岡文化芸術大学名誉教授
上野征洋

古来より図書館は「知恵の泉」でした。図書館は水道や電力と同じ社会必須のインフラであり生命を育てる空間です。幼児が読んでもらう幸せにふれる絵本、若者が「不撓の精神」に奮い立つ偉人の伝記、高齢者が「学びなおし」で若さを取り戻す専門書。その風景は世代を超え、多様なニーズに応え公平な機会を提供する「知の交差点」とも言えるでしょう。県立図書館は地域の図書館、学校図書館など多くの学びの場を結ぶネットワークの核です。その貴重な役割に空白を生じてはなりません。それは知の空白になります。人々の想いを反映し、多様な学びが交差する新図書館は、デジタル化やAIの活用などでさらに大きな役割を果たすことでしょう。世代差も地域差も超え、近未来を展望する新しい「学びの場」の誕生です。その一日も早い開館を願ってやみません。

図書館からこんにちは♪

玄関から広がる知の世界–「展示」のご紹介–

静岡市立中央図書館　主査　井柳　京子

中央図書館では令和3年の大規模改修を機に、2階にあった展示スペースを1階玄関ホールへと移設しました。来館された皆様の目に自然と触れる場所となったことで、展示をきっかけに本との新たな出会いが生まれています。

現在1ヵ月から2ヵ月の期間で、話題のテーマを扱った展示や美術館・博物館とのコラボ展示などを開催しています。今年3月には、中央図書館開館40周年を記念して「時代を彩る乙女の美学」と題し、静岡市在住のきもの文化研究家・萩原敏司氏の所有する、江戸時代の貴重な資料や色鮮やかな錦絵など、女性の教養をテーマにした多彩な資料を展示しました。

また5月には「もっと！しずとしょ！！～図書館のヒミツ大公開～」と題し、図書館の舞台裏をテーマにした展示を開催しました。ガラスケースには、地下書庫まで忠実に再現した職員手作りの中央図書館のジオラマ（**写真**）を展示し、その精巧な作りは大変話題となりました。

今後も「しずとしょフェスタ」の関連展示をはじめ、様々な企画を予定しています。本を借りるだけではなく、知識や感性を広げる場として、図書館の展示が皆様の知的好奇心をくすぐる入口となれば幸いです。

しずとも情報

’25　しずとしょフェスタ～どこ？ここ？としょかんでさがしもの～

10月26日（日）9:30～16時頃
会場：静岡市立中央図書館

同館と当会との共催。おはなし会やスタンプラリーなど親子で楽しめる企画満載です。
静岡県出身の造形作家・山形明美さんの講演は、14:00～15:30。詳しくは同封のチラシをご覧下さい。

静岡県図書館交流会

11月9日（日）13:30～
会場：静岡県立中央図書館

静岡文化芸術大学の林佐和子教授とゼミ生による講演があります。

かがくいひろしの世界展

2026年1月10日～3月22日
会場：静岡市美術館

会期中の1月31日（土）、2月11日（水・祝）、3月14日（土）に「絵本を楽しむおはなし会（仮）」が開かれ、当会も運営委員を中心に協力します。

※申込が必要なものもあるので詳細はご確認願います

2026年第18回総会・記念講演会

2026年3月8日（日）
総会14:15、記念講演14:30～16:00
会場：アイセル21　1階ホール（葵区東草深町3番18号）
講師：作家、脚本家　岡田真理（おかだ・まり）さん

（プロフィール）

1978年静岡市生まれ。立教大学卒業後、フリーランスライターとして約15年にわたってプロ野球を中心にスポーツの現場を取材。2023年に脚本家でデビューし連続ドラマの脚本を担当。24年には『ぬくもりの旋律』（河出書房新社）で小説家デビューし、静岡書店大賞小説部門大賞を受賞。今年8月に第2作『眩光の彼方』（祥伝社）を発表。

※岡田さんは静岡市在住。第1作ではスポーツ紙記者、第2作ではスカウトが主人公。プロ野球選手の夢や挫折、再起を軸に温かな物語が展開します。現場を知る作家だからこそ描けるアスリートの心理描写や臨場感も魅力。講演では読書体験の原点や創作の裏話を伺います。

静岡図書館友の会会報　No.34　2025.10
静岡図書館友の会代表　川村 美智
HP:http://shizutomo.jp
会員数：201人（2025年9月1日現在）

編集後記

今号から会報作成担当になりました。皆さんの力をお借りして、完成することができてホッとしています。これからも図書館を大切に思う皆さまに情報をお届けしますので、よろしくお願いいたします。（T）